

老いた光る君

「今朝は冷えるな」そう呟いて男は車に乗り込んだ。エンジンをかけた瞬間気が付いた。「あ！書類を忘れた」慌てて家に戻る。「何！忘れ物？」奥方の声を背にドタバタと自室に向かい、机の上の会議資料を抱えて車に戻る。

さあ急がなくなっちゃと思った瞬間、財布がないことに気が付いた。しょうがないなと再び玄関を開ける。「どうしたのよ？また忘れ物？ボケたんじゃない？」と奥方。「うるさい！おまえごときに、ボケたなどと言われる覚えはない。」と腹立ち紛れに悪態をつきながら自室に入る。

そのとたん狼狽した。「俺は何を取りに戻ったんだっけ？」焦れば焦るほど思い出せない。「そつだ財布だ」と思い出したものの、深い闇に引き込まれるような恐怖に襲われた。「しょうがないわね。そんなこと

で仕事大丈夫なの？皆に迷惑かけてるんじゃない？」奥方が傷口に塩を塗るように追い打ちをかける。「やかましい！おまえがごちゃごちゃ言うからだ」と捨て台詞を残して男はやっと家を出た。

加齢に伴う記憶力の減退は避けようがない。ボケの予防策は、バランスのよい食事や適度な運動などに加え、多くの人と交わることが大切と言われている。また、一説によれば異性に興味を持つこと、即ち恋は脳を活性化し、ボケや認知症予防になるそつだ。その晩の男と奥方の会話である。「俺をボケ呼ばわりするなら、ボケ予防に恋でもしてみるか」「あら！できるものならやってごらんなさい」「俺だって昔は光る君と言われたもんだ、チャンスはある」そこへ奥方のとどめの一撃が。「今のあなたは、頭が光る君